

創世記 3 章

3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

3:2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。」

3:3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

3:4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。」

3:5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

3:6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

3:7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

3:8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間隠れると、

3:9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」

3:10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

3:11 神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

3:12 アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

3:13 主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

3:14 主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。」

3:15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く。」

3:16 神は女に向かって言われた。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は、苦しんで子を産む。お前は男を求め彼はお前を支配する。」

3:17 神はアダムに向かって言われた。「お前は女の声に従い取って食べるなど命じた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。」

3:18 お前に対して土は茨とあざみを生えいさせ野の草を食べようとするお前に。

3:19 お前は顔に汗を流してパンを得る土に戻るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に戻る。」

3:20 アダムは女をエバ（命）と名付けた。彼女がすべて命あるものの母となったからである。

3:21 主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。

3:22 主なる神は言われた。「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」

+++++

今日はイエス・キリストの十字架を考える前の、なぜ十字架が必要だったのか、どうして私たちの生き方がそれほど深刻なこととして理解されているのかを考えてみたいと思います。

ここに挙げている聖書箇所は創世記 3 章ですが、それ以前にこういう言葉が書かれています。

創世記 2 章です。

2:8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。

2:9 主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生え

いでさせられた。

・・・

2:15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。

2:16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。

2:17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

2:18 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

1) 園の中央・善悪の知識の木

「園の中央にある善悪の知識の木」というのはいかにも象徴的な名前です。「中央」はまさに神の座であり、「善悪の知識を知る」というのは物事の正確な判断基準を持つ神様ご自身に向けられている表現と理解できるからです。

それを取って食べる時、あなたは「必ず死んでしまう」と言われたのは、その行為が「自らを神と等しいものと勘違いさせる要素」を持ち、土のちりによって造られ、いのちを吹き込まれて生きるものとされた人間が、まるで「創造主」であるかのような振る舞いをするようになるからです。その勘違いは、ある意味で致命的なものになります。陶器を作っている職人に向かって、造られたお茶碗が、「こんなものを作ってくれて迷惑している」と騒ぎ出している様子と似ています。

2) 心の分裂

人がそれを取って食べる時「必ず死んでしまう」と言われた言葉が実現してしまいました。

つまり、もともと神が願っていた人間と神との関係が歪み、自らの判断で神を「客観視」するような態度を取るようになり、自分の判断が神の判断と同等に意味があり、価値があり、間違いがないと思いつつようになってしまったのです。

謙遜な神への礼拝の心が失われ、かわって、神に対して恐怖心、疑い、神から逃れたい気持ち、神の思い通りに動きたくない気持ちが心の中に増殖してきたのです。まず正しい関係が死んだのです。

でも神の形に似せて造られたというところが残っていますから、自分の間違っている部分や神が正し

いとする部分も、断片的に残っているので、本当に平安な気持ちで生きられなくなってしまっているのです。

罪は「的外れ」そして、その的外れは「心の中に神の王座と自分の王座」を持ってしまっていることから引き起こされる的外れです。そして関係の死をもたらしめます。そして不安が増大します。

常に、心の中で「神の判断基準と自分の判断基準」との間に戦いがあり、迷いがあり、多くの場合、神の判断に OK を言えない弱さを持っているのです。というよりも、何に対しても「イエス」と言っても不安になり、「ノー」と言っても不安になる傾向性を私たち人間全員が持っています。

罪は、外側に表現される悪という形だけでなく、私たちの「心の奥深い部分にある分裂状態、あるいは分断状態」こそ、深刻なのです。

3) 心の分裂からの恐れと言ひ訳

人の心に分裂が起こり、神との断絶が起こると、恐れが入り込み、不安になり、その恐れや不安の言ひ訳を自分の外に探し出す傾向を人間はもっています。素直に「ごめんなさい」を言えない心がそこにはあるのです。それこそ、神の前にまっすぐ立てない心であり、罪の心です。言ひ訳だけがうまくなるのです。

創世記の記録はそれを如実に表現しています。

3:6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

3:7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

3:8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、

3:9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」

3:10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

3:11 神は言われた。「お前が裸であることを誰が告

げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

3:12 アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

3:13 主なる神は女に向かって言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

男はこの問題を神のせいにし、女性のせいにしました。

女性はこの問題を蛇のせいにしました。

でも、本当はその行為を実行したのは自分たちでした。

まずは、そこから認めるべきでした。でも、できない心がそこにあるのです。罪の心、的外れな心。

これらの言い訳を聞くと「的外れだな」と思います。

でも、それが今の私たち人間の心そのものでもあると思います。

4) 原福音と呼ばれている預言

3:14 主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。」

3:15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く。」

この文章の終わりのところに「。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く。」という言葉があり、

「かかとを砕く」という表現は救い主の苦難お予告であり、「頭を砕く」という言葉は「悪の根を断つ」

「この問題について根源的な解決をもたらす」という意味があると考えられています。

メルギブソンが製作した映画「パッション」の中に、始めの場面にイエス様が蛇の頭を踏みつける場面が印象的、象徴的に描かれています。

5) 分裂した心が生み出す悪、不義、不敬虔にたいする処分

神様は、長い時間をかけて、イエス様の十字架への道を準備なさいました。

その間、人の罪は増大し、高慢になり、自分こそ神だと言い出す人間さえ起こりました。

しかし、時至って、神は御子イエス・キリストを地上に遣わし、心が分裂している人間の間に住ませ、それがどれほど人間を不幸にしているか、

またどれほど神の心を痛めているか味わい、最終的には、人間が引き起こしてきた神に対する罪の清算を十字架によって決済してくださったのです。

そこには罪の赦しがあり、神の愛の注ぎがあります。

しかし、肉体の中に生きている間、人間は「心の分裂状態」から完全に自由になることはできません。

だからこそ、継続的な振り返りが必要であり、継続的な十字架への信頼と赦しの確認が必要なのです。

本来人間に与えられた「神のかたち」が壊れ、歪んだままでは人間は自由になれず、平安を維持することができません。

イエス様の十字架は、それを全く新しくするための方法として神様が選ばれた手段

なのです。